

書評

## 鳥海早喜『新興写真の先駆者 金丸重嶺』（国書刊行会 2021年）

石川 徳幸\*

### 1 はじめに

金丸重嶺（1900-1977）は、1926（大正15）年に日本初の商業写真専門スタジオ「金鈴社コマーシャルフォトスタジオ」を鈴木八郎とともに設立した商業写真の草分け的存在であり、当時の最先端の写真技法を紹介した著書『新興写真の作り方』（1932年、玄光社）などの業績によって「新興写真」の第一人者として知られた人物である。また、1939（昭和14）年には日本大学専門部芸術科写真科の初代主任に就任するなど、写真教育者としても活躍した。

一般に、金丸重嶺の今日における知名度は必ずしも高いとは言いがたいが、金丸の名前を知らなくとも、金丸が1943（昭和18）年に制作し、当時の朝日新聞東京本社前の日本劇場の壁面に掲示された写真壁画作品《撃ちてし止まむ》を歴史資料として目にしたことがあるという方は多いのではないだろうか。戦中期に活躍した写真家としては、対外宣伝を担ったグラフ誌『NIPPON』を手がけた日本工房の名取洋之助に関する研究については多くの蓄積があるものの、それらに比して、同時期に日本の写真界の発展に大きく貢献した金丸重嶺に関する研究は、意外な程に少ない。

金丸に関する先行研究が少ない理由について、本書の著者は「戦前の商業写真は記名で公表されることが少なく、金丸の活動や制作物が判然としない」ことや、「金丸が戦後、写真教育者や評論家という立場にあったこと」から、写真家中心に構成される写真の歴史の中で教育者・評論家として位置づけられた金丸が紹介される機会が少なかった点を指摘している。<sup>(1)</sup>

本書は、そうした状況にあった写真史の間隙を埋める先駆的な研究として位置づけられるものである。すでに「令和2年度日本写真芸術学会賞・学術賞」を受賞するなど高い評価を得ているため、屋上屋を架すことに懸念がないわけではないが、これから本書を手にする読者の一助となることを期し、以下に本書の概要をまとめたうえでジャーナリズム史の視座から考察を加えたい。評者は写真研究に関しては門外漢ではあるが、本稿の目的は本書がもたらした知見が周辺領域に貢献する点について論及することにある。

### 2 本書の構成

本書は著者である鳥海早喜氏の博士論文「金丸重嶺研究：新興写真時代の活動と初期写真教育を中心に」（2014年、日本大学）に大幅な加筆・修正が施されたものであり、金丸重嶺に関する論考が以下の4部構成で収録されている。

はじめに

序 なぜ今、金丸重嶺なのか

第1部 金丸重嶺の生涯

---

\*いしかわ のりゆき 日本大学法学部新聞学科 教授

- 第1章 戦前・戦中：1900（明治33）年～1945（昭和20）年
- 第2章 戦後：1945（昭和20）年～1977（昭和52）年
- 第2部 新興写真とはなにか
  - 第1章 新興写真の導入
  - 第2章 新興写真の職業分野
- 第3部 写真家金丸重嶺
  - 第1章 金鈴社コマーシャルフォトスタジオ時代
  - 第2章 初めての海外取材と武井武雄の肖像
  - 第3章 ベルリンオリンピックと渡欧取材旅行
  - 第4章 戦時体制下における活動
- 第4部 写真教育者金丸重嶺
  - 第1章 日本の写真学校黎明期
  - 第2章 日本大学専門部芸術科写真科と金丸重嶺
  - 第3章 金丸重嶺の写真論
- 結
- あとがき

第1部は、金丸の生涯をとらえた評伝となっており、続く第2部から第4部における考察の土台が形成されている。とくに、写真家としての活動を論究する第3部や、写真教育者としての活動について論究する第4部を理解するためのアウトラインとしても役立つものである。金丸の業績や生涯に関しては、古希記念の刊行物（非売品）や、<sup>(2)</sup>日本大学芸術学部写真学科の研究紀要『FONS ET ORIGO』の特集としてまとめられてきたものの、<sup>(3)</sup>一般に公刊された本格的な評伝としては初めてのものと言えるだろう。

第1部第1章「戦前・戦中：1900（明治33）年～1945（昭和20）年」では、まず金丸の写真との邂逅から金鈴社の設立の過程が詳らかにされており、ともに金鈴社を立ち上げる鈴木八郎との出会いから訣別についても明らかにされている。1925（大正14）年に開設した「金丸写真研究所」の事業内容からも、金丸の「時代の先を読み、これまでにない写真の在り方を提案」<sup>(4)</sup>する写真観が描かれており、金丸が職業写真家として歩み始めた様子が史料に基づいて活写されている。さらに、1927（昭和2）年に杉浦非水が主宰した商業美術同人会「七人社」の同人となったことで、グラフィックデザイナーなど隣接する分野との交流によって、活動範囲が変化していったことが明らかにされている。次いで、商業写真家としての地歩を固めた金丸が、1931（昭和6）年以降に報道写真の分野でも活動していった過程が詳述されており、建国されたばかりの「満洲国」への撮影旅行や、日本新聞社新連盟の特派員として赴いたベルリンオリンピックでの撮影、日中戦争における武漢侵攻作戦従軍取材に携わった様子が描かれる。また、国策としての写真制作に従事していった一方で、次の世代を担う人材育成のために写真教育活動にも関与した経緯が明らかにされている。

第1部第2章「戦後：1945（昭和20）年～1977（昭和52）年」では、写真家としての制作活動から、教育や評論へ軸足を移していった過程が描かれる。金丸は1946年3月に工科から改組された日本大学専門部芸術科長に就任し、新制大学に移行した1949年には日本大学芸術学部の初代学部長に就任した。学外においても、日本広告写真家協会（APA）の初代会長として広告写真の発展に尽

力するなど、写真界の功労者として活躍したことが詳述されており、1977年に癌で没するまでの活動がまとめられている。

第2部では、「新興写真」の概念規定とともに、関連して「商業写真」や「広告写真」の定義づけがなされており、「新興写真」が日本の写真史においていかに位置づけられるかが示される。

第2部第1章「新興写真の導入」では、新興写真前史として日本写真史の黎明期を概観したうえで、ドイツを中心としたヨーロッパの新しい写真表現が日本に移入される過程が詳述されている。さらに、現代において「新興写真」と同義的に扱われる「近代写真」について取り上げ、それぞれの概念を精緻化して論じている。

第2部第2章「新興写真の職業分野」では、時代によって解釈や定義が異なる「商業写真」と「広告写真」について、金丸重嶺の講義ノート『Commercial Photograph』の記述をもとに、本書における定義をまとめている。さらに、商業写真・広告写真と併せて1930年代に登場した概念として「報道写真」を挙げ、現在と異なる意味合いで用いられていたことが明示されている。

第3部では写真家としての金丸重嶺の活動が、第4部では教育者としての金丸重嶺が論究されており、日本大学芸術学部所蔵の金丸重嶺資料群や金丸の自邸書庫に残された資料を駆使して詳述されている。貴重な一次史料に基づいて金丸の写真家としての信念にアプローチしたこれらの論考は、本書の白眉ともいえるものである。

第3部第1章「金鈴社コマーシャルフォトスタジオ時代」では、1925（大正14）年に「金丸写真研究所」を興した金丸が、翌年に鈴木八郎とともに「金鈴社コマーシャルフォトスタジオ」を設立した時期の写真家としての活動を論じている。旧知の仲であった鈴木と共同経営した「第一次金鈴社」の活動と、鈴木と袂を分かち金丸単独での経営に乗り出した「第二次金鈴社」の活動を、それぞれの時期に制作した商業写真をつぶさに紹介しながら、その特徴を明らかにしている。

第3部第2章「初めての海外取材と武井武雄の肖像」では、まず金丸が仕事以外で撮影したスナップ写真や満洲取材旅行で撮影された写真が紹介され、商業写真家として培ってきた新興写真の表現技法を、文化や風俗を撮影する報道写真に活かしていったことが示される。さらに、童画家・武井武雄との接点と関係性が、金丸が撮影した武井の肖像写真群とともに紹介されている。総じて、本章ではこれらのスナップ写真やポートレート写真を通じて、金丸の写真家としての制作姿勢が描き出されている。

第3部第3章「ベルリンオリンピックと渡欧取材旅行」では、ベルリンで開催された第11回オリンピック大会の取材旅行の様子と、そこで撮影された写真について詳しく論じられている。また、ヨーロッパへの道中など、1936（昭和11）年6月の出発から11月の帰国までの間に撮影された各地におけるスナップ写真についても取り上げられている。

第3部第4章「戦時体制下における活動」では、1938（昭和13）年に従軍取材を行なった武漢侵攻作戦や、国策宣伝のためのパンフレットや写真壁画の制作について論じられている。ここでは、国策宣伝のために金丸が手がけた具体的な作品として、東部防衛司令部編纂の『わが家の防空』と『中島飛行機パンフレット』の2つの小冊子と、1940（昭和15）年のニューヨーク万博で展示された写真壁画《現代日本生活》の「農夫」と「労働」、1943（昭和18）年の陸軍記念日に合わせて制作された写真壁画《撃ちてし止まむ》が取り上げられている。

第4部第1章「日本の写真学校黎明期」では、金丸が初代主任となった日本大学専門部芸術科写真

科の成り立ちが示されたうえで、東京美術学校臨時写真科とそれを起源とする東京写真専門学校と東京高等工芸学校印刷工芸科写真部、そしてオリエンタル写真学校と武蔵野写真学校といった黎明期の写真学校が、比較として論及されている。

第4部第2章「日本大学専門部芸術科写真科と金丸重嶺」では、まず金丸が写真科主任に就任するにあたって出した条件や写真科設立当時の授業科目などが示され、いかなる写真教育が構想されていたのかが明らかにされている。さらに、バウハウスの流れを汲む新興写真に基づいた写真教育機関として位置づけられている日本大学専門部芸術科写真科について、具体的にいかなる影響をバウハウスから受けていたのかを、三つの段階に分類して論じている。

第4部第3章「金丸重嶺の写真論」では、金丸が日本大学においてどのような教育を実践したのかを、金丸の著作や、4冊の講義ノート进行分析して論じている。

上記の構成のなかで、本書では総じて41点の口絵写真と208点の図版が用いられており、金丸重嶺の生涯を追いながら、その写真家としての主要な業績を確認することができるようになっている。

### 3 本書の意義とジャーナリズム史研究との関わり

金丸重嶺に関する初の本格的な研究書である本書の意義は、第一に、金丸重嶺がいかなる人物であったのか、その人物像を描きだしたこと。第二に、写真家として金丸重嶺がいかなる信念を持っていたのかを解明したこと。第三に、金丸重嶺の活動を通して、「新興写真」とは何かを定義づけ、その日本写真史における位置づけを明示したこと。そして第四に、金丸の活動を通して「写真教育」とは何かを考察し、その淵源を明示したことである。

本書の主題でもある「新興写真の先駆者」としての論旨に関しては、すでに写真史を専門とする研究者による批評があるため<sup>(5)</sup>、本稿では、敢えて本筋から逸れる箇所にも注目し、本書がもたらした知見が、周辺領域の研究分野に波及する効果について考えたい。

#### ジャーナリズム史の研究視角：「報道写真」とジャーナリズムの社会的役割

評者が専攻するジャーナリズム史の視座から見て、金丸の報道写真に関する業績と識見は極めて重要なものである<sup>(6)</sup>。金丸が報道写真に関与するようになったのは、先述のとおり1931（昭和6）年頃からであるが、当時はまさに新聞界にとって報道写真の転機といえる時期であった。1925（大正14）年にラジオ放送の開始が始まり、1931年に勃発した満洲事変の第一報を新聞に先駆けてラジオが伝えたことで、新聞は速報性を新興メディアであるラジオに奪われることとなった。そこで、新聞各紙は「写真号外」と呼ばれる組写真を駆使した号外を発行することで、視認性と詳報性といったプリント・メディアの特性を活かした報道を行なったのである。そうした時代的要請のなかで、当時の写真家たちは「報道写真」の社会的役割をどのように捉えていたのであろうか。

そもそも、「報道写真」という言葉は、名取洋之助がレポルタアゲ・フォト（Reportage-Foto）の訳語について伊奈信男に相談した際に生まれたものであるとされ<sup>(7)</sup>、実際に戦前・戦中期の「報道写真」に関する研究は名取洋之助の日本工房を中心として論じられてきた。ここでいう日本工房が提唱した「報道写真」とは、「事件や出来事の決定的な瞬間を撮影した一枚の写真を指すのではなく、事件や出来事を連想させる写真や、社会的な問題を提起させるための写真を複数枚用いて組写

真としてまとめて表現するもの<sup>(9)</sup>」のことである。一方、近年になってオリンピック報道に関する業績が再注目されたものの<sup>(10)</sup>、やはり金丸重嶺といえば「商業写真」の文脈で論じられることの方が多く、本書が注目するまでは金丸の報道に関する業績はやや閑却された状態にあった。

金丸重嶺は当時、ルポルタージュ・フォトの訳語として「報導写真」を用いており、「知らせ導くというひとつの主観を報道の中に入れなければならぬ」という考えから、「導」の字を当てていたという<sup>(11)</sup>。著者が指摘しているように、当時の「報導写真」は「その「導く」という要素が戦時体制のなかで強まり、結果的に「国策宣伝写真」や「宣伝写真」と呼ばれるものにかたちを変えていくことになる<sup>(12)</sup>」のであるが、こうした歴史的教訓を踏まえたうえで、金丸の「報導」という視座はジャーナリズムの客観性を再検討するための材料として有用である。評者は、今日のメディア環境の変化とジャーナリズム不信の風潮に対して、民主主義社会に積極的に関与するジャーナリズムの姿勢が重要であることを論及し、従来のように事実を客観的にただ伝えようとするだけでは、ポスト・トゥルースによる「公共圏の汚染」の進行は止められない旨を議論してきた<sup>(14)</sup>。あくまでも民主主義社会に資するという目的に則したものでなければならないが、「知らせ導くというひとつの主観を報道の中に入れなければならぬ」という金丸のジャーナリズムに関する思想は、是非を含めて今日のジャーナリズムの課題を考えるうえで示唆に富むものである。

また技術的側面においても、「あくまで事実を事実のままに撮影し、演出や極端な加工を加えない」ことを前提とした現在の報道写真とは異なり、「当時の報道写真は「知らせ導く」ためであれば、演出や合成といった加工も行われていた」ことが指摘されている<sup>(15)</sup>。こうした「演出」の可否に関する視点も、誰もが情報の送り手となり得る SNS 時代のジャーナリズムの在り方と AI 加工画像の使用をめぐる議論などに寄与するだろう。

#### ジャーナリスト教育の研究視角：新聞社の写真記者採用

評者はこれまでに日本の高等教育機関におけるジャーナリズム／ジャーナリスト教育に関する研究に携わってきたが、金丸重嶺の写真教育に関する知見は、この研究領域に関しても示唆を与えるものである<sup>(17)</sup>。なお、本書のほかに著者は「日本大学芸術学部写真学科と金丸重嶺」と題した論稿も発表している<sup>(18)</sup>。

金丸重嶺は、1938（昭和13）年に東京写真専門学校<sup>(16)</sup>の講師となり、翌年に日本大学専門部芸術科に写真科が設置されると初代主任に就任し、これ以後、本格的に写真教育に従事していった。日本大学専門部芸術科写真科は、その設置にあたって「芸術写真はもちろん、ルポルタージュ写真をはじめ、科学写真、商工業方面の応用写真の研究指導」<sup>(19)</sup>を謳っており、その射程に報道写真や商業写真を含んでいたことがわかる。戦後1946（昭和21）年3月に行われた改組によって日本大学専門部芸術科に写真・映画・文芸・造形・音楽の五学科が設置されると、金丸は芸術科長に就任し、さらに写真科主任と文芸科主任を兼務した<sup>(20)</sup>。金丸が主任を務めた文芸科の設立趣旨には、「社会、思想、経済、芸術各般の諸科学を教え、新聞、雑誌、放送などジャーナリズムに必要な技術及び文芸技術を実習させ、ジャーナリスティックな文化技術者を養成する」<sup>(21)</sup>ことが謳われている。翌年に日本大学法文学部に設置された新聞学科は「平和国家として又、文化国家として更生する日本の現状及将来にとって、新聞の担う使命の重大さに鑑み、新聞に関する科学的研究と新聞人として活躍せんとする人材の育成を主眼とする」<sup>(22)</sup>ことを謳っているが、同じジャーナリストの養成を目途とするなか

で、芸術科の方が「技術」の修得に重きを置いていたことがわかる。このことは、「写真の科学と、芸術の原理を考え、基本技術と表現技術を実習させ、一切の写真知識と技能を持ち、しかも社会文化性の豊かな写真技術者を養成<sup>(23)</sup>」<sup>(23)</sup>とした写真科の要項（1948年）にも見ることができる。

評者はかつて、戦後のジャーナリスト教育に関する拙稿のなかで、「記者は現場で育てるものという徒弟式訓練を重視する職業的文化」あり、「こうした根強い職業的文化と、新聞学科という新設の大学教育に対する現場からの不安も相まってか、新聞社側は総じて、採用活動において新聞学科の卒業生を評価しないという立場を取った」ことを、占領期のCIE（民間情報教育局）報告書や日本新聞協会の資料をもとに明らかにした<sup>(24)</sup>。しかし、これは一般の記者職採用に関する論考であり、写真記者（報道カメラマン）の採用については十分な分析を行なっていなかった。本書が明らかにした金丸重嶺の「あくまで写真は社会とつながりを強くもちながら存在すべきである<sup>(25)</sup>」<sup>(25)</sup>といった写真教育に関する知見は、戦後の写真学科がジャーナリスト教育の一端を担っていたことを示している。写真記者のような専門の技術を要する職種の採用に関して、写真学科で専門技術を修得した学生が優位であったのか否か、実証的なデータに基づいて分析する必要があるだろう。無論、これは本書が負う課題ではなく、本書が周辺領域へ与えた波及的な効果の一つである。

以上のように、本書は写真史や金丸重嶺研究としての成果はもとより、ジャーナリズム史研究やジャーナリスト教育研究に携わる者にとっても重要な知見をもたらしている。本書の知見をもとに、諸領域におけるさらなる研究の発展がもたらされることを期したい。

- (1) 本書 P.11。
- (2) 金丸重嶺『嶺：金丸重嶺先生古希記念』金丸重嶺先生古希記念出版事務局、1974年。
- (3) 『FONS ET ORIGO』「金丸重嶺先生追悼号」（Vol.V, No.2, 1978年）、「特集金丸重嶺追悼」（Vol.VI, No.1, 1978年）、「金丸重嶺生誕100年記念号」（XⅧ, No.1, 2000年）、「没後40年記念写真家金丸重嶺：新興写真の時代1926-1945」（Vol.XX, No.1, 2017年）。
- (4) 本書 P.24。
- (5) 例えば、松實輝彦「分厚く逞しいネットワークカーとしての金丸重嶺の姿が浮かび上がる：評伝を兼ねた初の本格的な研究書」『図書新聞』2022年5月28日。
- (6) とくに本書第2部第2章、第3部第4章を参照のこと。
- (7) 本書 P.110。
- (8) 例えば、白山真理・堀宜雄（編）『名取洋之助と日本工房：1931-45』岩波書店、2006年。
- (9) 本書 P.111。
- (10) 『金丸重嶺 vs 名取洋之助：オリンピック写真合戦1936』JCII フォトサロン、2018年。
- (11) 本書 P.111。
- (12) 本書 P.112。
- (13) 石川徳幸『言論と政治の関係を考える』日本経済評論社、2025年、pp.217-224。
- (14) 「研究討論会の記録」『ジャーナリズム&メディア』22号、日本大学法学部新聞学研究所、2024年3月、pp.39-50。
- (15) 本書 P.112。
- (16) 例えば、石川徳幸「戦前期日本の高等教育機関における「新聞教育」の萌芽」（『ジャーナリズム&メ

ディア』11号、2018年3月）、同「戦後日本の「新聞教育」と日本新聞協会」（『ジャーナリズム&メディア』14号、2020年3月）がある。

- (17) とくに本書第1部第1章と第2章および第4部第2章を参照のこと。
- (18) 鳥海早喜（2020）「日本大学芸術学部写真学科と金丸重嶺」『饗誌』15号、日本大学大学史編纂室、2020年3月。
- (19) 『日本大学芸術学部五十年史』日本大学芸術学部、1972年、pp.159-160。
- (20) 本書 P.55。
- (21) 『日本大学芸術学部五十年史』日本大学芸術学部、1972年、P.261。
- (22) 『日本大学新聞学科五十年の歩み』日本大学法学部新聞学科、1997年、P.20。
- (23) 『日本大学芸術学部五十年史』日本大学芸術学部、1972年、P.261。
- (24) 石川徳幸「戦後日本の「新聞教育」と日本新聞協会」『ジャーナリズム&メディア』14号、日本大学法学部新聞学研究所、2020年3月、P.22。
- (25) 本書 P.60。